

家庭科教員養成における実践的指導力の育成 (1) — 高大連携による保育の授業研究 —

井上 えり子・山内 拓司*

Fostering Practical Teaching Skill in Training Home Economics Teachers (1):
A Study of Nursery Class with Cooperation between High School and University

Eriko INOUE and Takuji YAMAUCHI*

Accepted November 9, 2007

抄録: 本研究の目的は、実践的指導力を育成する家庭科教育法のプログラム開発と授業実践によるその効果の検証である。第1報ではプログラムの全体構成と指導過程および研究授業の構成を述べる。プログラムは本学（「中等家庭科教育Ⅲ」, 3年後期, 2005年10月～2006年1月, 受講生19人）で実施した。不登校問題に対応した保育の授業研究を行い、その中で実践的指導力を育成することを目指した。定時制高校で3回の研究授業を実践し生徒のコミュニケーション能力が向上するなどの成果が得られた。

索引語: 家庭科教員養成, 実践的指導力, 高大連携, 保育

Abstract: The purpose of this study was to develop a program of Home Economics teaching to foster practical teaching skill and to verify the effect by practicing the program. In the first report, the general structure of the program and the structure of the experimental class, which practices the program, are introduced.

This program was practiced in the class, 'Home Economics Teaching for Secondary schools 3' that is supposed to be registered by third year students at Kyoto University of Education from October in 2005 to January in 2006 with 19 students. The class studied Nursery class that corresponded to the problem of continuous absent in schools and was aimed at fostering practical teaching skill. Three classes were practiced at a part-time high school and resulted in developing students' communication skills.

Key words: Home Economics teacher training, practical teaching skill, cooperation between high school and University, nursery class

* 京都教育大学大学院教育学研究科

1. はじめに

本研究の目的は実践的指導力を育成する家庭科教育法のプログラム開発と授業実践によるその効果の検証である。実践的指導力の育成は1990年代の各国教師教育改革の共通テーマであり、大学の教員養成ではその育成が強く求められている。ところが、実践的指導力に関する具体的内容も育成方法もいまだ明確ではないと指摘されている^{注1)}。例えば、1997年7月の「教育職員養成審議会第一次答申」で示された実践的指導力に関する文言（いつの時代にも教員に求められる資質能力）は、「教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、これらを基盤とした実践的指導力等」のように幅広い概念である。

しかし、大学の教員養成の現場で、このすべてに対応することは現実には困難である。同答申では大学での実践的指導力形成の具体的方策として、教職科目での子どもや教育に対する理解の強化や子どもとの直接的ふれあいの機会の設定、現代的教育課題への対応などの方向性を示し、翌1998年の教育職員免許法の改正では子ども理解の充実や教育課題への対応力の育成を中心とした教員養成カリキュラム改革が実施された。

本研究では、こうした近年の教員養成改革の動向を踏まえ、子ども理解の深化と現代的教育課題への対応力の育成を主眼とし、さらに家庭科の専門的力量形成を目指した家庭科教育法のプログラム開発と実践による検証を目的としている。

このため教科教育法のプログラムに、①公立高校定時制課程（以下、定時制高校）との密接な連携による授業研究および②現代的教育課題である不登校問題に対応した家庭科の授業研究を導入した。講義において授業研究を行い学習指導案と教材を作成し、それに基づいて受講生が定時制高校で研究授業を実施する。教育現場での実践を踏まえることにより、模擬授業の実施に留まっていた従来のプログラムより高次のレベルでの教材研究・授業研究を行うことが可能になる。また、現代の定時制高校の生徒は不登校経験者の割合が高く、その支援の一環としてコミュニケーション能力の育成を主眼とした保育の授業研究を実施することにより、対象生徒の学習課題や生活課題に対応した家庭科の授業研究を目指した。

定時制高校と連携したのは以下の3点の理由による。第1点は授業時間帯が重ならず昼間に大学で授業研究を行い、夜間に高校で実践することができる点である。第2点は筆者のひとりが定時制高校に勤務していることから高校側の全面的な協力が得られた点である。第3点は学生たちとは異なる家庭環境で生活している生徒とのコミュニケーションを通して生徒理解を深めることを意図したからである。定時制高校には家庭的にも経済的にも困難を抱えている生徒が少なくない。こうした生徒たちへの理解を深めることを意図したのである。

本研究では、人間の発達や子ども理解など教師教育の基本となる事項が含まれている保育学習を題材として授業研究を行う。なお、研究は2報に分けて発表し、本稿（第1報）ではプログラムの全体構成と指導過程および研究授業の構成を述べる。後日発表予定²⁾の第2報では受講生のレポート分析と指導過程での観察結果をもとに受講生が獲得した知識・技能・実践的思考を明らかにするとともに、生徒に対する観察結果と事後の感想文などの分析により研究授業の成果について検証する。

2. 研究方法

プログラムは筆者のひとりが担当する「中等家庭科教育Ⅲ」(3年後期, 2005年10月～2006年1月, 受講生19人)において実施し, 研究授業は京都府立朱雀高校定時制(以下, 朱雀高校)で行う。「中等家庭科教育Ⅲ」は教育実習を終えた学生を対象とした講義であり, 授業実践力の育成を目的とし, 表1に示したプログラム構成とした。受講生は最初に朱雀高校の概要・生徒の様子について講義を受け, 3つのグループに分かれ授業研究を行う。講義時間は全体で15時間(90分授業×15回)であるが, グループ活動には8時間必要であり, うち3時間を講義(テーマ設定・模擬授業・検討会), 残り5時間(3グループで計15時間)を補講(学習指導案・教材作成・研究授業)とした。第1グループの研究授業終了後, 従来から実施している公立高校と附属中学校の現職教員による講義を行い, 引き続き第2グループ, 第3グループの授業を実施, 最後に全員にレポートを課した。

表1 中等家庭科教育Ⅲプログラム

回数	内 容	時間数(1時間90分)	中等家庭科教育Ⅰ	2年後期・基礎的内容
1～3	授業の目的方法	3時間	中等家庭科教育Ⅱ	3年前期・指導案作成・模擬授業
4	朱雀高校概要・朱雀高校教員	1時間	教育実習	3年9月 主免実習 4週間
5～7	第1グループ(グループ活動)	3時間 5時間(補講)	中等家庭科教育Ⅲ	3年後期 授業研究・研究授業
8	公立高校現職教員講義	1時間	教育実習	4年6月 副免実習・2週間
9	附属中学校現職教員講義	1時間	グループ活動	
10～12	第2グループ(グループ活動)	3時間 5時間(補講)	1時間	テーマ設定
13～15	第3グループ(グループ活動)	3時間 5時間(補講)	3時間(補講)	指導案・教材作成
課題	レポート提出	計 15+15時間	1時間	模擬授業・検討会
			2時間(補講)	研究授業(40分+45分)
			1時間	検討会

研究授業は朱雀高校の「発達と保育」(2単位, 3年・4年選択, 13人)において3回(2時間×3回, 6時間)実践する。授業は発展学習と位置づけ1回ごとに完結した内容とする。受講生はグループごとに各1回分の学習指導案を作成, 模擬授業と研究授業を実践し, 翌週に授業検討会を持ち最後にレポートを課す。これら一連の授業研究の成果について受講生および朱雀高校生徒のレポートやビデオ撮影による記録などの資料を分析し, その効果を検証する。

3. 研究授業の目標と指導過程

3.1 研究授業の目標と教育方法

乳幼児とのコミュニケーション能力を身につけるためには, 発達に対する基本的な知識を踏まえ, 行為や言葉を乳幼児(他者)の視点から理解することが必要である。その上で発達を保障する育児支援のあり方を思考し実践する力の育成が求められる。また, 学習過程において教師および生徒相互間のコミュニケーションを図ることがこれらの能力を高めるために有効であると考え。よって, 本研究

授業の目標は次の3点とした。①乳幼児の発達を踏まえて子ども（他者）を理解する（知識・理解）、②乳幼児（相手）の視点から育児支援を考える（思考力・判断力）、③教員と生徒間、生徒相互間のコミュニケーションを図る（コミュニケーション能力）。

このため、教育方法は生徒教師間および生徒相互間のコミュニケーションを重視する方法を導入する。歌や紙芝居、アクション、ロールプレイング、擬似体験、グループでの話し合い、発表などの活動を積極的に取り入れることとした。対象生徒は親しい友人間以外の人とのコミュニケーションを避ける傾向にあり、このような活動を授業に取り入れることは朱雀高校では実験的な試みである。また、図表やビデオなどの視聴覚教材、書き込み式のプリントを準備し、丁寧で分かりやすい授業を目指した。

3.2 指導過程

受講生にとって定時制高校での授業は初めての体験であり授業に不安を述べる学生も少なからずいた。そこで教材研究の方法（参考文献の指示、視聴覚教材・実習教材・配布プリントなどの作成方法）を詳細に個別指導し、模擬授業および授業練習を重ねることで不安を軽減し、自信をもって授業に臨めるよう指導した。

加えて、受講生にはチームワークを重視して授業研究を行うよう指導した。当該学生は小集団活動の経験はあるが、多くの場合、一部学生が過度の負担をしており、全員が活動に参加することが難しい。そこで、グループ内の役割分担を明確にして自己の責任を果し、全員が関わる活動では目標を共有して活動するよう指導した。役割分担を決める際には可能な限り得意分野と不得意分野両方を経験するよう助言した。

授業の題材は、グループで決定（時間の制約上、第1グループのみ教員が題材提示）、全員が学習指導案を作成し話し合いの上、一案を提出、次いで提出された学習指導案の問題点を指摘し教材研究を指示する。個別指導によって学習指導案を完成させるとともに教材を作成し模擬授業、練習授業を行った。これらの過程を通じて研究授業への意欲を高め、さらに研究授業を成功させ達成感や成功体験を共有することで教職への意欲を高めることを目指した。研究授業終了後は、撮影したビデオ映像を視聴しながら、全員で検討会をもち、授業の成果と課題の確認を行った。

4 研究授業の構想と実践

4.1 研究授業の基本枠組み

研究授業は2時間（40分＋45分）であり、1回ごとに完結した内容である。授業の流れは導入→展開1（前半）→展開2（後半）→まとめとし、導入では授業の目的を伝えとともに生徒の意識を授業に集中させ、展開1では発達に関する知識を理解させ、展開2で活動を通して理解を深め、まとめでは獲得した知識をもとに乳幼児（他者）の視点から育児支援を思考するという構成とした。

この構成は研究授業の目的である乳幼児の発達を踏まえて子ども（他者）を理解する（展開1）と乳幼児（相手）の立場から育児支援を考える（展開2）に対応したものである。先述したように、教員と生徒間、生徒相互間のコミュニケーションを図るに対応して、双方向的な教育方法を導入した。3つの研究授業は内容としては独立したものがあるが、回を重ねるごとに授業者と生徒相互のコミュニケー

ションが深まるよう教育方法を配置した。

4.2 第1グループの授業内容

第1グループのテーマは「発達と進化」である。このテーマは朱雀高校の「発達と保育」の導入部分(4月)の既習内容を発展させたものであり、筆者らが提示したテーマである。本テーマは保育の授業で取り上げる題材としては難しい内容であるが、以下の理由からあえて設定した。

京都府は1970年代から高校家庭科の男女共学に取り組んだ地域であり、民間教育団体による授業研究も盛んに行われた。こうした熱心な教員の中で参照された保育実践が「さくらさくらんぼ保育園」の実践であり、園長の斉藤公子が編集する『みんなの保育大学』(築地書館、1979年初版発行、シリーズ全13巻)である。ここでは、子どもの発達過程を理解するために、人類の進化や発展に関する科学的な知見から学ぼうとする視点を指摘することができる。発達への科学的アプローチには様々な方法が考えられるが、本授業では京都府の授業研究の系譜につらなる「発達と進化」の視点から授業研究を行うことにした。

導入では、授業者と生徒とのコミュニケーションを図るための方策として授業者が作詞作曲したオリジナルソング(赤ちゃんの歌)をギターで演奏し全員で歌う活動を取り入れた。この活動は生徒を授業に集中させるとともに授業者と生徒との距離を縮めるアイスブレイクの役割を果たした。演奏や歌唱は本時の授業者の得意分野であるが、ここから他受講生も自分の得意分野を授業に生かすことを学んだのである。

朱雀高校の生徒たちはすでに「個体発生は系統発生を繰り返す(反復説)」という発生と進化に関するテーマを学んでおり^{注3)}、授業前半ではこの内容に関連づけながら、サルからヒトへの進化過程における直立二足歩行の重要性を押さえた。これらの内容については紙芝居教材をつくり、物語としても視覚的にも楽しめるものとした。物語は10の場面(宇宙、太陽、地球、魚類～ヒト(系統図)、熱帯雨林、猿人の樹上生活1・2、サバンナ、原人の狩り、原人の採集、言葉の使用)からなり、宇宙の始まりからヒトの祖先の誕生と生活環境を示し、そこでの二足歩行の役割を知らせるものである。紙芝居を上演し、その後、ふりかえりシート(プリント)を使って反復説や直立二足歩行の用語や意味を確認するとともに、ヒトの進化と乳幼児の発達過程に類似性がある点を押さえ、乳幼児の発達過程においても二足歩行が重要であることを確認した。

授業後半では、直立二足歩行するまでの準備として2種類のハイハイ運動の役割に注目した活動(アクション)を行った。近藤四郎によるとハイハイには左足―左手―右足―右手の順序で移動する後方交叉型と左足―右手―右足―左手の順で移動する前方交叉型の2種類がある^{注4)}。前者は哺乳類、爬虫類、両性類に、後者は霊長類一般にみられる。乳児のハイハイは最初は後方交叉型のみであるが、二足歩行ができるようになると前方交叉型も現れるようになる。両方とも全身の筋肉を鍛えるが、後方交叉型では筋肉への負荷が大きく、前方交叉型は脳の発達によって可能となることを実際に授業者や生徒が2種類のハイハイを実演(アクション)することによって実感した。まとめでは、アクションをもとに、ハイハイ運動を保障する保育環境を考えさせ、空間や安全性の点から配慮すべき点を発表させた。

本授業では、授業者と生徒双方に緊張がみられたが、オリジナルソングや紙芝居、ハイハイの実演(アクション)を通じて緊張がほぐれ授業者と生徒とのコミュニケーションが図られた。

4.3 第2グループの授業内容

第2グループは食生活に関心のある受講生が多く、テーマを「離乳食をととして学ぶ保育者の役割」に設定した。対象生徒はすでに離乳食の調理実習を終えており、離乳食の意義や簡単な作り方については学んでいる。そこで、乳幼児の摂食機能の発達を取り上げ、既習の内容を深めることとした。受講生は山崎祥子『じょうずに食べる食べさせる』（芽ばえ社、2005年）をテキストとして乳幼児の摂食機能について学び、乳児の舌や口角の動き、口腔の発達などに注目した図表などの教材を作成した。

導入部分ではクラッカーと衛生ボーロを生徒に食してもらい、大人と乳児の口腔や摂食動作の違いについて意識させる活動を取り入れた。授業前半では、離乳の各時期（初期・中期・後期）の摂食機能とそれに対応した離乳食の形状について作成した図表を使い説明した。

授業後半では、受講生が準備した3種類の離乳食（初期・中期・後期）を使用して食事場面のロールプレイングを行った。生徒は2人1組（乳児役と保育者役）になり互いに離乳食を食べさせあう。生徒は前半で学習した知識に基づいて乳児の舌や口角の動きを模倣して食することで乳児の視点を獲得していく。さらに、ここでは「声かけ」に注目して食事場面での乳幼児と保育者のコミュニケーションについて学習できるよう構成した。ビデオ教材（NHK スペシャル「赤ちゃんこのすばらしき生命」1993年4月18日放映、を編集して一部使用）を視聴し、乳児が母親の声かけに応答している様子を観察させた。そして、声かけの重要性に気づかせ、次に声かけを意識したロールプレイングを行い、これらの活動を通じて保育者の役割を考えさせた。まとめでは、プリントを使用して乳幼児の立場に立った食事支援について考えさせ気づいた点を発表させた。

朱雀高校ではロールプレイングなど生徒同士が関わる活動はほとんど取り入れられていない。人付き合いが苦手であったり、特定の人としか関われなかったりする生徒が少なくないからである。本授業のように、ペアで離乳食を食べさせあう活動を苦手とする生徒たちであるが、ここでは全員が活動に参加し生徒2者間のコミュニケーションも深まり、初回よりもコミュニケーションの広がりが確認された。

4.4 第3グループの授業内容

第3グループのテーマは「子どもの見る世界」である。グループ内に住居に関心があるものが多く、乳幼児の空間認識の発達をテーマとしたのである。ここでは主として視覚機能を取り上げたが、この内容は生徒にとっては未知の学習内容である。

乳幼児の視覚機能の発達に関する資料は少なく、受講生は山口真美『視覚世界の謎に迫る』（講談社、2005年）をテキストとして学ぶとともに本学附属幼稚園で幼児の視線からビデオを撮影し実際に幼児がどのように空間を認識しているかを迫体験する活動を試みるなどして教材研究を行った。

研究授業の導入部分では、だまし絵を用いて見ることと分かることの違いを実感させ、視覚機能についての関心を高めた。授業の前半では、眼球の構造図を示し見える仕組みや乳幼児の視覚（視力）の発達過程について図表をもとに説明した。次に両手を広げて正面から見える範囲（大人の視野）を確認した。そして、子どもの視野を疑似体験する「チャイルド・ビジョン」（幼児視界体験メガネ）^{注5）}を作成し着用する活動を行い子どもの視野への理解を深めた。

授業後半では、視線の高さにも注目して幼児とのコミュニケーションを考える活動を行った。実施した活動は写真から情報を読み取り小グループで話し合い意見をKJ法でまとめ発表する活動である（フォトランゲージ活動）^{注6）}。使用した写真は研究活動への使用許可を得て受講生が撮影した幼児と

大人が話している様子を写した写真（大人が幼児を見下ろしている）と幼児と大人が階段を下りる様子を写した写真（大人は前を見ているが幼児は足元を見ている）である。グループには生徒だけでなく、授業補助者（3人）や朱雀高校の教員（3人）も入り、フォトランゲージをもとに出てきた意見をKJ方によってまとめた。まとめでは、各グループから出た意見をもとに、子どもの視野からみたコミュニケーションや育児支援の方法を確認した。

第2グループのロールプレイングによる活動がスムーズに行えたことから、本授業ではグループでの話し合い活動を実施した。ここでは、普段グループ活動を苦手とする生徒たちが、積極的に参加する様子がみられるなどコミュニケーションの発展と深まりが確認された。

4.5 実践の成果

研究授業の総合的評価は、次報で報告する生徒の評価と総合して行う必要がある。したがって、ここでは生徒のコミュニケーション能力の育成の視点から授業実践の成果を整理しておく。

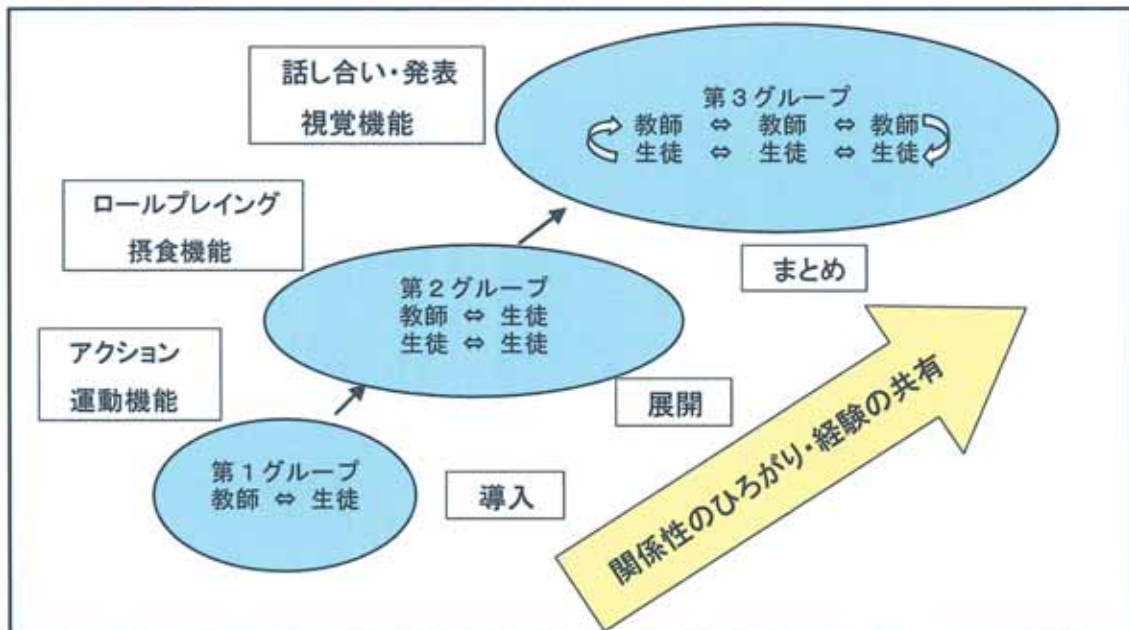
表2は研究授業の内容を示したものである。各授業では運動機能、摂食機能、視覚機能の発達に関する知識理解を深め、それをもとに乳幼児の視点に立った育児支援を考える構成とし、さらに生徒自身のコミュニケーション能力を育成するためにアクション、ロールプレイング、話し合いなど活動的教育方法を導入した。

表2 研究授業の内容

	第1グループ	第2グループ	第3グループ
テーマ	発達と進化 (導入部分の発展学習)	離乳食をとおして学ぶ保育者の役割 (離乳食の発展学習)	子どもの見る世界 (新規の学習内容)
知識・理解	・運動機能の発達 ・「個体発生は系統発生を繰り返す」(反復説) ・ヒトの進化における二足歩行の役割 ・ハイハイ運動(後方交叉型と前方交叉型)の役割	・摂食機能の発達 ・摂食機能の発達に対応した離乳食 ・食事場面における声かけの重要性	・視覚機能の発達 ・子どもの視野の範囲 ・子どもの視野からみたコミュニケーション
思考力・判断力	・「ハイハイ」運動を保障する生活環境を考える	・乳幼児の立場から食事支援を考える	・幼児の視野からみた支援を考える
教育方法	・オリジナルソングの合唱 ・紙芝居の実演 ・アクション(「ハイハイ」の実演) プリント	食事援助ロールプレイング ・視聴覚教材(ビデオ・掲示物) プリント	・チャイルドビジョン作成(疑似体験) ・フォトランゲージ活動 ・グループ活動 ・視聴覚教材(写真・掲示物) プリント

図1は、生徒のコミュニケーションの広がりを示したものである。第1グループでは授業者と生徒間の活動、第2グループでは生徒間（ペア生徒）の活動、第3グループでは小集団（生徒・学生・教員）活動と、回を追うごとに関わる人々が増え関係性が広がる構成となっている。段階的に活動を広げていくことで、最終的にグループ活動まで実施することが可能となった。加えて、第2グループが食に関わる活動であった点も授業者と生徒との距離を縮めるのに効果的であった。この結果、本研究授業の最終授業では生徒全員が活動に参加するという成果が得られたのである。この点は生徒の普段の様子（集団活動を苦手とする生徒の状況）からみれば大きな成果であったといえる。

図1 研究授業の構成とコミュニケーション能力



注

- 1) 山崎準二, 教師教育の新動向, 現代カリキュラム事典, 日本カリキュラム学会, ぎょうせい, 2001年, p.463.
- 2) 山内拓司・井上えり子, 家庭科教員養成における実践的指導力の育成 (2) —コミュニケーション能力を育てる保育学習の構想と実践—, 京都教育大学教育実践研究紀要第8号, 2008年3月発行予定投稿中.
- 3) 反復説は研究者からは批判されており, 近年では「個体発生は系統発生を作出する」(ブライアン・K・ホール, 進化発生学, 倉谷滋訳, 工作舎, 2001年 pp.59 — 61) というテーゼが発表されているが, ここでは反復説を既習していることと批判内容を理解するには高校生レベルでは困難であると判断し, 反復説に基づく授業を実施した.
- 4) 近藤四郎, 足のはたらきと子どもの成長 みんなの保育大学④, 築地書館, 1981年. pp.84 — 85.
- 5) トラック・パートナー (街の子どもたち) 特別付録, Honda 発行, 2002年.
- 6) 横浜市社会福祉協議会, 福祉ワークブック, 2002年.

参考文献

- 井尻正二, ひとの祖先と子どものおいたち みんなの保育大学①新装版, 築地書館, 1995年.
 近藤四郎, 足のはたらきと子どもの成長 みんなの保育大学④, 築地書館, 1989年.
 山崎祥子, じょうずに食べる食べさせる, 芽ばえ社, 2005年.
 山口真美, 視覚世界の謎に迫る, 講談社, 2005年.